無くなつて跟いて來る。そこでそれを少しづゝ分けてやると邪念が去つて自然に向上の精神が起り悟つて來ると云ふので、觀世音に向つて自分は鐵鉢を以て此通り衆生を善良にしたと話すと、觀世音がそれでは私が世音に依つて導くとどちらが優つて居るか判斷を受けようと云ふので、お釈迦樣の處へ行つて如何でござらうと云つて判斷を請ふた、所がお釈迦樣は文殊に賛成しないで、それはお前には鐵鉢で導くことが出來るが是より後に法を傳へる者は御馳走政略は行かぬ、矢張り說法敎化が大切である。『以ヲ聲論ヲ宣ニ明道法ヲ』と云ふ法則を採る方が宜しいから觀世音の說を可とすると判斷せられた、此の時には流石の文殊も鼻を折られたといふことがある。聲の方は耳と心とを使はなければならぬから味よりは高尙である。故に六塵爲經と云ふが實は三塵爲經で色、聲、法が大切であると云ふことになつて居る。斯う云ふ風に佛陀は常に眞理を愛して敎を立てたことは明かであつて。そこに始終活きた精神が通つて居るのであります。

(3) 佛敎の容量

擴げれば天地宇宙が皆佛敎であるけれども、たゞさう言つただけでは分らないからどう云ふ風に考へたら宜いかと云ふと、先づ第一に實相と佛陀と云ふことを考へて見なければならぬ。

實相—佛陀（人格）
感化（佛敎）

先づ實相から佛陀、それから人格の感化が起つて、さうしてずうつと信仰と感化に依つて導かれた一切の事業が佛敎であります。其の事業の中にはどう云ふ事を含んで居るかと云へば、『世法開顯』と云つて世間を棄てゝは佛敎は活動しない、而して世間の問題は人を善良にし世の中を進めて行くにあるのであつて、釈迦牟尼が說いた如く、世法を說くも第一義を了解せしむること蓮の如しである。佛敎は寺院の中にもお經の

中にも住まつて居るものでなく、佛教の住家は卽ち人文の中である。又日蓮上人の言はれた所に依れば「宮仕が法華經」である。或は「天晴地明」とも言はれて居つて此の意味が顯れると佛教は廣く軍人、學者、政治家一切の人の精神中に活躍するのである、然るに佛教は小さい函の中に入つて居つて蠹が付いて居ると思ふて居るのは全く佛教を知らない謬である。又涅槃經に五行と云ふことがある。五行とは聖行、天行、梵行、嬰兒行、病行であります。例へば嬰兒行と云ふのは、嬰兒と共に遊んでこれを感化するやうに人を導いて行くので、どんな大學者であつても世を感化するためには身を落してどんな事でもすることが必要である、故に佛弟子の中には百姓の中に入つて百姓を感化する人もある。又病行と云ふのは故らに盜をして牢に入つて囚人を感化するやうなことで、今日の如く監獄教誨師を置くことを知らぬ時分には、故らに簡單な罪を犯して牢に入つて囚徒を感化し。罪が輕いと云ふので放免すると、再び饅頭の一つか二つも盜んで牢に入つて感化に努めたと云ふ、かゝる高僧が日本にもあります。なか〳〵寺院内に寢て居つて經を讀んで澄まして居るやうなことばかりが佛教の行ではありませぬ。

それから佛教には『分身』と云ふことがある。例へば觀音の三十三身、妙音の四十四身と云ふやうなことがある。さうして此の分身中には長者身と云つて金持となり、宰官身と云つて宰相關白となり、婦女身と云つて將軍の奥樣になつて居る者もあり、又童男童女身と云つて小供となつて居るものもある。故に觀音の像を見ると色々の像があります。既に分身として働く觀音でさへも、さう云ふやうに樣々の働きをするやうになつて居るのであるから、本尊たる佛は三十三身や四十四身に限つたものではなく無限でありまして、或は超絶的の本佛として釋迦牟尼が働くこともあるが、精神感化の上から云へば職工の精神中にも入つて働けば、車掌や馬丁の精神中にも入つて働くのである。佛教は斯の如く見るのが本統の見方であつて又それが進歩して居る思想であります。

(4) 佛教の本質

然らば佛教はさう云ふ活きた働きを現はすことが元からあるかと云へば、無論佛教は根本からさう云ふ活きた教であつて佛の働きは先程申したやうに智の方から云へば權智實智と云ふものでありまするし、慈悲の方から云へば世間出世間に亘つて居るのであります。

佛智 ｛權智／實智｝

慈悲 ｛世間／出世間｝

法華經の普門品に『能救ニ世間苦ニ』と云ふことが書いてありまするが、釋迦牟尼は死んだ人の六道の辻に徨ふもののみを救ふのでありませぬ、生きた人間に向つて教を立てた者であります。今では人が死ぬると寺に持つて行きますが、昔お釋迦樣の所へ死人を舁ぎ込んだことは一度もありませぬ。『引ニ導於衆生ニ』と云ふことは、生きた人を說法し感化することで、お釋迦樣が死んだ人を引導をしたと云ふことは一度もない。活世間を救ふために教を立てたのであるから、實智の出世間的なる非常に高遠な教を立てる時にも釋迦牟尼は現實を救ふ目的で教を立てるのであると言つて居る。

法華經に『我此法印充ニ足世間ニ』と云ふ語がありますが、『我此法印』と云ふのは實相であります、一番高い深遠の眞理を說いて居る時にも、現實の世間を完全に充足し全き人生を作り上げんがためにこの實相法印を說くのであると云ふて居るのであります。此の點から云へば多くの哲學者などの方がお釋迦樣よりは汪遠な所に行つて居るのである。お釋迦樣は汪遠でない、何となれば哲學者は慈悲と云ふものが缺けて居るがお釋迦樣には慈悲心がある。慈悲心は至誠息むなしと云ふてじつとして居られるものでないのである。佛の仕事を言ひ現す時には衆生濟度と云ふことを申しますが、濟度は

世間出世間に亘りて濟度する意味である。それで常に『爲レ度ニ衆生一』と云ひ、初めにも爲度衆生と云ひ、色々說き終つた後にも爲度衆生と云ふ。此の意味を解釋すると佛敎を奉ずる者は、活きた人生を濟度せんがために此の敎を說くのであるといふ活きた目的物を忘れてはならぬのである。佛涅槃の時大勢の佛弟子が寄つてお釋迦樣の有り難いことを讃めやうとしてお釋迦樣はえらい人で眞理を悟つて居ると云ふやうなことを言ふて見たが、佛は智悲圓滿で世間出世間に亘り盛んに活動せられたのであるからとてもそんなことでは佛の德を言ひ現はすことは出來ない。或は嬰兒が母を失ふやうなものであるとか或は大海に船を失ふやうなものであるといろ〳〵にいふたのであるが、大迦葉がいふには、佛の智慧を讃めるのは慈悲を讃めるのには及ばない、佛は智慧を表にせず慈悲を表にして居るのであるから慈悲を讃めなければならぬ。慈悲は又世間的の所を讃めなければならぬと云ふので、段々論究した結果『以ニ慈心一遊ニ世間一』と云つて、釋迦牟尼が地上に降つて我々に解る語を以て、直接に敎へて下さつたことを、第一の讃辭としなければならぬと云ふので、大迦葉の讃辭が最も勝れたものと認められたのであります。日蓮上人も此の精神を以て働くのが佛敎徒の本領であるとして居る。斯樣に考へ來つて見ると、佛敎の本質はなか〳〵迂遠なものでなく、よく現實に調和されて行くことが分るのであります。

＊　＊　＊　＊　＊

佛敎の本質について更に考へなければならぬ事は天地宇宙の眞實の有樣であります。これを科學的に申しますれば天地宇宙はたゞ物質の集りでありますけれども、哲學的に申しますれば非常に玄妙なものであつて容易に判斷の出來難いものであります。けれども段々推し究めて考へますると、宇宙の實相は非常に尊い完全なる意味合のものが總てのものに行渡つて居るのであります。卽ち妙法と稱すべきものでありまして、如何なるものでも絶對の價値を有つて居るのであります。それを『眞如』と稱し或は『絶對我』と稱し或は『普遍我』と稱し、或は汎神的の意味から云へば宇宙の萬象は

總て神であると申すのでありますが、さう云ふ具合に觀た場合を實相觀と申すのであります。宇宙を大觀すれば一物として粗末なものはない皆絶對の現れであると觀るのであります。法華經の語では之を諸法實相と申します。萬有卽實相であると云ふので諸法實相と云ふのでありますが、哲學的の語で申せば現象卽實在であつて、現象の一時的に見ゆるもの丶中に絶對の本質本體が含まれて居る、現象卽本體、現象卽實在であると云ふのであります。皮相の眼から見れば事々物々變化窮りないが、實相觀より觀れば皆絶對不變のものであると云ふのでこれは西洋の哲學に於ても佛敎に於ても認めて居る所である。又儒敎でも太極は兩儀を生じ、四象を生じ萬有を生ずると云ふて居る、卽ち太極が實相で一切のものは無限の現れて居るものである、簡單に云へば事事物々は實に何とも言へぬ玄妙の形に現はれて居るのであつて之を讃歎して妙法と云ふのであります。

所がこれは實相觀と云つて宇宙を同時に空間的に平たいものに抑へ付けて考へた場合でありまして、これを時間的に考へると、其の發動があつてそれが色々に違つて現はれる。大き〳〵發動するものも小さく發動するものもあつて發動の狀態が違ふのであります。例へば同じ大地から大きな松も生ずれば小さな草も生ずると云ふ風に變つて來る。元は同じでも現れは違つて來る、此の現れの觀方を『緣起觀』と云ふのであります、實相觀は靜的狀態に於て見るのでありますが、緣起觀は動的狀態に於て見るのであります。緣起と云ふのは緣に觸れて其の物が皆動いて居る有樣を云ふので、全體のものに發動したのと幾らか妙法の有樣を覆ひ隱して現はれたのとの別があります。卽ち其の現れが法性的に諸法の性の儘に現れるのと無明的に現れるのとあるのであります。此を法性緣起、無明緣起と申すのであります。これが諸法の有樣に於て大事なので儒敎の方では陰陽と云ふ語で說明して居りますが、さう云ふ語よりも此の方が非常に進んで居るのである。佛敎ではたゞ陰陽と云ふ語で說明するのと違つて、法性的に現れるのと無明的に現れるのとの差であるといふ風に說明して居ることは尊とい觀

方であります。法性そのまゝの緣起であるが故に佛は救濟のために法性的に働き、衆生は益々向上して法性に進まなければならぬ、其の儘置けば益々墮落すると云ふことになつて來るのであります。

法性緣起はもう一つ進んで佛界緣起となり、佛の活動を實相の儘に見て居る、故に法卽ち佛であり『法佛不二』であつて佛は眞理の活現體である。皆全體を全うして現れ、實相を全うした佛、實相を全うした衆生である。佛敎ではこれを法界觀と云ひ、哲學で云へば宇宙觀であります。さうして佛の方を觀察するのが佛陀觀超人觀であります、衆生の方を觀察するのを人身觀と稱して居ります。此の三つは相離れない關係で、衆生は法界を全うしての衆生、佛は法界を全うしての佛であります。然るに宇宙を觀るのに佛も衆生も見ないで、たゞ虛無大空であると云ふ風に見るのは粗末な觀察で抽象的の實在論であります。實相的に觀るときは精神的實在を認め、宇宙の完全なる意義を代表した現れを認めるのであつて、そこに人格實在論が起つて來るのであります。このことは法性緣起に依らなければ、十分の說明は出來ませぬ、本具がなければ進化は出て來るものでない。進化は卽ち本具の靈性の發現であります。而して其の本具の完全な現れが卽ち佛であります。

又これを國家組織の上に考へて見ても矢張り其の通りで、日本の國體の如き天來の皇統は、最初から完全の意味が現れて居る。そして國民と皇室との間に離るべからざる關係があつてどこ迄も互に和して進んで行くのであります、其の有樣は丁度宇宙の有樣も國家の有樣も同じであります。故に日本の國體のことは色々議論があるが、法性緣起的に說明せられて居るのである。之に反し西洋の國體は無明緣起的に說明されて居る。我國の國體が萬邦無比であることは、卽ち神勅を奉じて起つたことが法性的であつて國家組織體が法性的佛界緣起であると云ふことに在るので、これが佛敎の宇宙觀とよく符合して居るのであります。

そこで此の全體を圓滿なる眞理と云ひ、又は宇宙の眞理と云ひ、『理』と云ふ語を多

く使かつて居ますが、『圓理』といふものは智の相手になつて現れるものであります、それよりは『圓慈』と云ふ方が尊といので、國家に就ても法律的に解釋された國家よりも、圓慈の方から見て、皇室と人民との間の關係を圓慈の關係に見るのか尊といのであります。

一切諸法は皆玄妙なるものであり、それが發動する場合には二面の現れがあつて、一方には法性的に現れたものと、他方には無明的に現れたものとある。此の關係は精神的には互に救ひ救はれると云ふ關係である。故に宇宙の着想に於て無論圓理を忘れてはならぬが、それよりも溫き慈悲の結晶である所の圓慈を尊ばなければならぬ。天地正大の氣と云ふ場合でも正大の氣と云ふのは法律のやうなものでなく、哲學で云ふやうなものでない、正大の氣なるものは所謂道德性なるものであつて、そこに凜乎として侵すべからざる方面と、慈愛の溫き方面と二つなければならぬ。正大と云ふ意味は卽ち恩威並び行はるゝもので權威と慈愛の二つの結晶したものである。これを推し究めて見れば圓慈觀と同じであるが、たゞそれが不透明である。儒敎の本義を考へても天道とか明德とか云ふことには明かに人格的の意味を認めなければならぬ。本統に推し究むれば儒敎でも、國體の上でも、佛敎でも人格實在を認め、圓理よりは圓慈に向つて進むやうにすべきである。これはどこ迄も日本人として將來に向つて研究を進めて行く必要があると信ずるのであります。

(5) 佛敎の敎義

唯今申した宇宙淤界と佛と衆生と此三つのものに就て、其の眞實の有樣を說明する所に敎と云ふものが起る。卽ち自然の狀態を敎へる自然法は宇宙と佛陀と衆生の三つのものであります。而して此の眞相を說明し此の三者の間の關係を說き吾人をして向上の道に進ませしむる所に佛敎の行法が生じて來るのであります。

これが佛敎の敎義であるが、これを說き分けると種々の意味に分出して來るので、

其の無量義に分れたものを開顯してすつかりを疏通し、こゝに統一法を說明したものが佛敎の歸結であります。故に佛敎を學ぶならば此の自然の狀態なり我々の實行方法なりを敎へた所の個々の分裂した敎義や無量義の一部に拘泥することなく、其の總てを開顯した統一的の歸着點に向つて研究を進めなければならぬのであります。これが佛敎敎義の大觀であります。

次に敎義上何が一番重いかと云ふとそれは佛と吾人との間の關係でありまして、これが又二つに分れて必然的の關係と精神的の關係とになる。必然的の關係は放つて置いてもその關係は絕えぬのである、何となれば實相より來て居るのでありますから眠つて居ても醉つぱらつて居つてもその體を同じうして居るのである、普遍我と云へば醉漢でも惡を犯して居つても普遍我であります。然しさう云ふ必然的に尊といと云ふだけでは宗敎の用を爲さぬのである。舜何人ぞ我何人ぞと云ひ或は王侯將相何ぞ種あらんと云ふやうなことを言つて見てもそんな事は何にもならぬ。實際に於てはそこに違ひが生じて居る。一方は法性的に現れて居るが他方は無明的に現れて居るから無明を段々辿つて居つたら憐れなものであります。そこで必然的の關係から更に進んで精神的の關係を見るのであつて、佛は救濟の慈悲を發し、我々は向上努力の道を辿ると云ふ此の間の接觸を見て行くのである。國家に就て考へても矢張り其の通りで、君主と人民と離れない關係が必然的に固より存するのである、國の成立の時からさう云ふ關係があるけれどもそこに活きた精神が上からも降り、下からも昇つて行かなければならぬのであつて、上から降る大御心と、下から昇る億兆一心の忠誠と合致してこゝに活き〳〵として發動して居るものが起つて來なければならぬ、現に活きた國民の億兆一心の精神が力を顯して居らなければならぬのである。それと同じく宇宙の問題も、佛に慈愛の力がなければならぬが、我々も亦渴仰信仰の力が活き〳〵として働いて居らなければならぬのである、之を精神的關係と云ふのであつて、そこが佛敎の敎義の最も大切なる所であります。さうすると云ふと此の間に結合を生じ、佛と衆生と

の關係から色々と尊とき信仰の効果が顯れて來るのであります。

(6) 佛教の行法

行法も色々に分れて居りまするが、大事な所は菩薩行である。小乘の教は我國には用ゆべからずと最初から極つて居つた位で、大乘の教を本としたのである。然るに獨然主義、未來主義と云ふやうなものが起つたのは其の方向を誤つたので、釋迦牟尼の說いた佛教はそんな不完全な單に現實に偏したり厭世に陷つたりする樣なものではありませぬ。釋迦牟尼が婆羅門を攻擊して起つた佛教建設の聖業はそんな幼稚なものではありませぬ。一方には現實に捉はれる者を戒めると同時に、一方には婆羅門が未來觀に陷つて恒河に身を投ずるのを見て、そんなつまらぬ事をするな己の精神の修養を積まず道德をも修めずたゞ未來に思を走せて神に縋るのは不都合極まると云つて、釋迦牟尼は最初から痛擊したのである。佛教の行法は大體に於て『自利・利他』と云ふのである。自己は信仰に依て平和滿足の精神生活を營み、又他に對しても自分の信仰に依つて之を導いて行き、或は色々の善根を積んで救濟事業をやつて行くのである。日本に佛教が渡つた時を考へても聖德太子が佛教を奉じた時分には鎭護國家と云つて國家を護るものとして用ゐ、三寶に歸せずんば何を以てか扞れるを直さんと云はれ、道德的に國民の精神の健全を圖ることに努められ、一方には天王寺を開いて療病院施藥院等を設け、社會事業を盛に鼓吹したのである。その後段々立派な高僧が出て傳敎大師も菩薩を養成しなければならぬと云ひ、又弘法大師も日本の文明に貢獻し、又日蓮上人に至つては大菩薩の行を積まれ忠君愛國のことにもせよ其の他の道德行爲にもせよ總て日本の文明を豐富にするために働かれたのである。佛の教に遵ふ者は如來の衣を着て、如來の座に坐し、如來の室に座せよと云ふことがある。如來の衣と云ふのは忍辱の衣であつて百折不撓の勇氣を忍辱鎧と云ひ、どんな困難にも屈せず爲し遂げて行くのが如來の衣である。又如來座と云ふのは法空とも云ふが、今日の語で云へば公

平無私の心、公明正大の精神である、そこが自分の座する處なりと知れと云ひ、又如來室と云ふのは慈悲を以て室となすので、我々の心に慈悲の心が動けばそこが如來の室であります。故に如來の室に入らんとすれば遠方に行くに及ばない、自分の心に慈悲心を起せば如來と倶に室に入ることが出來るのである。或は六波羅密の行として說いてあるがそれもむづかしい事では無い、極端に云へばむづかしくなるが例へば施の行をする場合には三施卽ち財施、法施、無畏施と云ふことを說いてある。各自の分に應じて社會救濟事業をやらなければならぬのである。日本は勿論他の國でも救濟事業は大事な問題となつて居るので多少でも資產や地位がある者は財施をしなければならぬ、社會の共同生存に於いて財施が發達しなければ完全な文明は顯れて來ない。それから法施と云ふのは或は講演會を開き或は著述をして國民を導くことで、金錢物品を以て施さないが知識技藝を以て施してやることであります。又無畏施と云ふのは人生意の如くならぬこと多く地位を得れば病氣が起るといふやうに盈つれば虧くる所が出來る、人生は決して完全とは云へぬけれ共大きな理想信念に活きれば疎食を飯ひ水を飲み肱を曲げてこれを枕とするも樂亦其の中に在る譯である。如何なる不愉快の立場に居つても偉大の道德信念に活きたるときはそこに安ずる所があつて、如何なる事に遭遇するも畏るゝことなく何時も平和の心に滿ちて生きて行く、恰も獅子が百獸の中に畏れざるやうに一切やつて行かうと云ふのが無畏施の行である。此の三施も菩薩行である、六度の一つである。結局菩薩行の結論はどう云ふ風になつて居るかと云へば不放逸であります。理想を立てゝそれを仕上げる迄は屈せず撓まずやつて行かなければならぬ、勇往邁進の奮鬪力をもつてどこ迄も進展して行くのが菩薩行である。さうして斯う云ふやうな道德性の事柄が澤山にありまするが、それを結んで見ると一信一誠である。この一信一誠から色々な美しい働きが現れて來るので、此の信仰の効果が現れて社會を益するを以て佛敎の行法として居るのであります。坐禪をするとか南無阿彌陀佛を唱ふるとか云ふことはそれは精神の置き處を定むる一の形式であつて、

これより進んで社會國家に貢獻して行かなければならぬ、佛教にては各人が精神を鍛へ上げてそれが光となつて世の中に發現して効果を生じて行くやうに菩薩行を奬勵するのであります。

(7) 佛教の效果

佛教は我國なり若くは世界に對して將來どう云ふ効果を現すかと云ふと、なか〳〵重大な使命を帶びて居るものと思ひます。

第一は哲學上の事について、佛教の位置は非常に尊といものであります。佛教哲學は前にも述べた如く、實相上の眞理から取つて人格實在の佛陀を建設して居ることに於て最も優れて居る。西洋の進んだ哲學者が時々さう云ふことを論ずるが、西洋ではまだ一人〳〵の一家言となつて居つて宗教とはなつて居らぬのである、たゞ佛教に似た事を卓識の人が時々言ふだけであります。佛教は長き歴史を經てよく整ふて居り、それが東洋の文明殊に日本の文明として消化されて居り、哲學上から云つても東洋哲學に貢獻し、進んで世界の哲學上に尊とき地位を占めて居るのである。又哲學は何ものにも大關係があつて、實際の事はそれ〳〵分れて居つても根本は皆哲學の根據に依らなければならぬ。今後思想の創造を試むるにしても必ず哲學の根據に依らなければならぬのである。家を建てるにも礎を堅固にして後でなければ大廈は建てられぬし。又橋杭を打込むにもどん〳〵と見えぬ位まで打込まなければ、橋を架することは出來ぬのである。橋上を通る人は知らずに居つても、橋杭が確つかりして居らぬと重い物を載せて通るとぐら付いて來るのであつて其の基礎の大切なることは言ふまでもありませぬ。實に東洋の文明に於ける基礎は何であるかと云へば、全く佛教を措いて他にないと言ふことは異論の無いことであります。

第二に道德上に於てはどうであるかと云ふと、我國に於ても特殊の道德があり又儒教にも道德を教へて居りますから佛教の專有すべきものではありませぬが、佛教が道

德の根柢を哲學上から與へて行くことは實に儒教の天道明德を說明する根據となり又日本の國體の根據を明かにして行くものであります。天來の皇統或は神勅の意味を他の科學や儒教や哲學に依て窺ふよりも佛教の教義に依つて窺ひますると、一層明かに日本の建國の事柄が分り、且つ確乎たる意味が顯れて來るのであります。其の事實は建國の時より存するのであるが、其の意義を人々に納得させる說明の法式としては佛教の說明式が最も好いのであります。道德は知つてもそれを實行する力は容易に現れて來ないので例へば忠愛の觀念があつてもそれを實際に行ふ力と云ふものはなか〳〵出て來ないのである。所が宗教の信仰が加はると人が眞面目になる元來『一誠』と云ふことは頗る宗教性のものであつて、その一誠は道德の根柢であり實行力の源である、眞にその一誠を尊崇するならば決して宗教の信仰を侮ることは出來まいと思ふのであります。今迄儒者が宗教の信仰を侮つたのは一誠を眞に諦めて居らぬからである。一誠は天地を貫くもので先帝陛下の『眼に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ』と仰せられた如く、誠の心があれば必ず神に通ふと云ふ所謂絕對位に對し、天地に對し、俯仰して恥ぢずと云ふ心が起つて來るのであるから、頗る宗教的のものであつて一面から云へば宗教であります。其の實行力を生み出す信仰はどうしても日本の文明に於ては佛教より來るものである。惟神の道も形式上には宗教の色彩を帶びて居るが、色々と人間を說明し感化する法式としては、佛教の樣に道具立が揃うて居らぬ。それについては佛教が非常に宜い。儒教の道德實行力も、學問をして行く人間には宜いけれども、無學の人にはちつと分り難い所もあり、まだよくこなれて居らぬ所がある。愚夫愚婦を感化し善導する法式も十分發達して居らぬ。心學道話のやうなものがあるが、洽く感化する力を有つて居らぬ。顏淵が陋巷にあつて肱を曲げて枕としても其の中に樂みを感じたと云ふが、それは法悅の生活に入つたので、さう云ふことは宗教の感化であつたら誰にでも出來る。顏淵一人それが出來て他の三千の弟子がそれが出來なかつたと云ふのは、儒教の教化であつたからであります、宗教の信仰であれば

陋巷にあつて肱を枕として樂むこと位は誰にでも出來るのである。納豆賣を連れて來ても顏回以上のことが出來る、そこが宗敎の感化力の偉大な所であつてこれを否定することは出來ぬ、東西と云はず古今と云はず、宗敎的信仰の感化に依つて道德の實行力を得て居ることは爭ふべからざる事實で、此の點に於て佛敎の社會に與ふる効果は永久に滅びざるものであります。

第三に美術に於ても東洋の美術は皆佛敎の影響を受けて居る。今尙ほ美術を觀察すると佛敎の尊い點が澤山顯れて居る。佛敎は美の實在と美の生命を說明して居るものである。

第四に政治上に於ても今日では憲法政治であつて、これは結構の事に違ひないけれども、政治の本體と云ふものは矢張り道德であるから宗敎の信仰が根據にならなければならぬのである。如何に權利義務を說いても根本となる道德の精神宗敎の信仰のやうなものが衰へて來たら幾ら巧みにやつてもうまく行くものでない。永久に政治の根本となるものは道義信念であつて、一方に政治を進むると共に一方に益々宗敎の高潔なる信仰を進めて行かなければならぬ。昔から大政治家は其の半面には道德宗敎を握つて居る。然るに道德宗敎を棄てゝ單に政治學の方面のみでは大政治家が出來る筈がない。又經濟との關係もさうでありまして、經濟と道德とは相離るべからざることは言ふまでもない。併しこれを道德などとむづかしく云はぬでも、經濟を專らやつて居る商人なり其の他の實業家なりの間に宗敎の信仰が入れば欺くとか不正の事は無くなつて、勤勞の精神も起り正直にして勤勞に勵む樣にもなり、經濟の振興することは勿論である。然るに勤勞せずして人を欺いても利益を得んとする者の多いのは根本の道德心が衰へて居るからであつてそれでは迚も經濟の發展は覺束ないのである。經濟の發展を計るには一方にどうしても道德宗敎を尊重しなければならぬ、人生の生活には衣食住の經濟が大切である、けれども慾望の高まる時には必ずそこに不足を感ずるのである。例へば煙草を吸ふ力のない者はどんな煙草でも吸ひたいと思ふが、刻煙草が

吸へるやうになれば卷煙草が吸ひたくなり、又卷煙草が吸へるやうになれば朝日から大和敷島と云ふやうに進んで、遂には一本五十錢も一圓もする葉卷を吸ひたくなるのであつて、斯う云ふ贅澤なものを一年も吸つて居つたら今度は一本五錢や三錢のものは吸へなくなる。其の通り生活上の慾望は限りがない。尤も生活上の慾望は抑へぬが宜いと云ふ議論もありますが。私の考では人間の慾望は程好く進むのは宜い、卽ち自分の生活と社會の狀態と正比例に進むは宜いが慾望の方が駈足で進むと、そこに恐るべき弊害が起る。馬は手綱を抑へても駈出したがるのに頻りに尻を叩いたならば益々駈けるであらう。故に此の信仰を慾望を節する手綱ともし不足を慰める力ともしなければならぬのである。日蓮上人が『女房と酒打ち呑んで南無妙法蓮華經』と云はれたやうに豆腐一丁で酒を飲んでも趣味はある。人間は心の合つた同士が寄つて居れば鹽煎餅を嚙つて居ても、親しく語れば非常な御馳走を食べるよりも愉快で物質的の足らざる所を補ふことが出來るのである、人生一般に精神的に滿足するにはどうしても宗教の信仰が加はつて行かなければならぬ、これは動かない眞理であります。人生の生活を完全にするには經濟の事も政治の機關も必要でありますけれども、どうしても信仰の慰安を根據として進んで行かなければならぬ。如何に生活狀態が進んでも政治機關が發達しても宗教的信仰の慰安がなければ益々人心に不平が起るのである。我々の考ふる所では佛教はさう云ふ點にも效果があると信ずるのであります。

國體を擁護し奉る點に於ては勿論、人道正義を發揚する上に於ても佛教の信仰は大切なことであります、自分の考ふる所では世界の文明を導いて行く上に於ても、第一日本に於て東西の文明が接觸するに當り、これを消化しこれを同化するには哲學の眞理、佛教の信仰のやうなものゝ力に依らなければ迚も同化することは出來ませぬ。たゞ在來の道德、歷史の因緣にのみ據つて居るやうな思想を以て西洋の文明、宗教、道德に對抗して行つたならば、日本の思想界は動搖するであらうと思ひます。諸君も其の實況を見られるでありませうが、尙ほこれから三年五年の間は、思想の動搖は益

益盛んでなか〳〵安心が出來ぬと云ふことは私が豫言者として申して置きます、國を思ふ志士の間に必ず額を鳩めて、大に論ぜらるゝことがあらうと思ひます。又必ず其の時に佛教に着想する人が現れるであらうと思ふのであります。

二、佛教の日本化

此の前に「佛教の渡來」に就て述ぶべきでありますが、今は之を略しまして、直ちに「佛教の日本化」に移つてお話を致します。

(1) 日本國と佛教

日本國と佛教との間にどう云ふ關係があるかと云ふと、一言にして云へば理想に於て一致して居るものである。日本の有つて居る理想目的と佛教の有つて居る理想目的とは全然一致して居るものであつて、日本の理想目的を明かにすることは佛教の理想目的を明かにするものであるし、佛教の理想目的を明かにすることは日本の理想目的を明かにするものであります。國と云ひ法と云ふ名は異つて居りますが、內容の理想目的は全然變はらないものと云つて宜しいのであります。これは深く日本の國を研究し、又佛教を研究したならば、確かにさうであると云ふことをお認めになるに相違ないのであります。

それを簡單に一言しますれば、日本の理想目的は國家を通して世界大の理想を發現するのであつて其の理想は卽ち天業である。天地の間にある大理想を代表して日本國が之を世界に顯して行くのである。佛教の理想として居る所も全くそれと同一である。ただ佛教は宗教と云ふ名に依つて認められて居るけれども、其の教は國の意味を尊重し、國に從つて適當に其教を顯して行くのである、佛は妙法を國王に附屬して國王の力と相待つて教が發現して行くことになつて居る。どちらも人生に慈愛を與へ人生を救濟せんとするものであつて、其の現れに於て佛教は慈悲感化を表にして居るが

裏には折伏と云ふことがあり、日本國は威力を表にして居るが其の裏面には慈愛があ
る。故によく研究すれば佛教の理想は國家の理想と異つたものでない。偏した者が考
へると國家主義者は宗教を問はず、宗教の側に立つ者は國家の事を問はぬと云ふ風に
見えるが、それは非常な間違である。元來國と教との間には本來の一致と云ふものが
ある、卽ち理想目的に於て日本國と佛教とは離れられない一致があつて佛教が日本に
適合し日本が佛教に適合して居るのである。又兩者が讓り合つて佛教が日本に合はぬ
所を改め又日本の風俗習慣も惡い所を矯られ兩方から融合した點もあります。佛教に
依つて色々日本の風俗習慣が變はつて佛教化したことは澤山擧げることが出來るので
建築、言語、習慣に於てそれを見ることが出來るのであります。それで日本人の血の
中には佛教が入つて居り、日本人の氣風は皆遺傳的に佛教風になつて居るのであります。

それから一方には佛教の日本化と云ふことがあります。佛教が日本國に同化して行
くのはどう云ふ點であるかと云へば、第一は國家的に明かになつて行くことである。
佛教が非國家的のもので世界的であつたのを無理に國家的にしたのでなく、佛教には
國家的の所があつてそれが明かになつて行くことであります。殊に國家的の點に於て
尊王主義となつて現れ同時に敬神思想となつて現れて來て居る。それから色々と現實
的に現れて來て現實に調和するやうになつて居る。卽ち國家的、尊王的、敬神的、現
實的に現れて、日本佛教としての特色を發揮するに至つたのであります。

(2) 國體と佛教

此の事は前にも述べた事がありますが、私の考ふる所では我國體に於ては皇統が大
切であつて、それから廣く教を容れる包容の精神、日本の神樣を敬ふ意義、それが道
德的であつて宗教の色彩を帶びて居る、單に道德でもなければ又全然宗教でもない。
日本の敬神の觀念は宗教を表にして現はれては居らぬが、道德的であつて宗教の色彩

を帶びて居るものである、これ等の點が日本の國體の大切な所であると思ふ。

日蓮上人は日本の國の優れたことを申しまして、八萬の國にも超えて居る國であるといひ、又皇統は天照大御神の御魂を御受けになつて尊き意味合のものであると云ふことを書いて居ります。日本國が八萬の國に超勝して居ると云ふ點は大事な點で、それをはつきり意識しはつきり言明したのは日蓮上人であります。又包容と云ふことについても其の精神は佛教徒に依つて明かになつて居るのであります。包容の精神は却て惟神の道を傳へて來た者は狹隘であつて、日本の大精神を明かにした者は儒者にも非ず神道者にもあらず確かに佛教徒であります。それから又國を思ひ日本の神樣を敬ふ精神となると日蓮上人の如きは三教融合について、最も明かに論ぜられて居るのでありまして、卽ち統一主義を畢生の主張とせられたのであります。

それから敬神の本義について考へても、道德的にもこれを尊敬しなければならぬが、日蓮上人は之を道德的にして而かも宗教的の意味を以て、國の護り神として尊敬して居るのであります、國の護り神と云ふことを明かにしたものは儒者にも教育者にもなく西洋の學者にもない、全く佛教徒の力であります。又神道家に於ては國の護り神を絶對の神樣のやうに云つて居るけれども、國の護り神といふことは宗教上より適當の觀念を以て見なければならぬのであつて、佛教は其の點を融合する働をして來て居るのである、此の思想を完全に現はして來たものは三教融合派であります。

(3) 日本の國民性と佛教

日本の國民性と佛教は如何なる關係にあるかと云ふと、日本の國民性には長所もあり短所もあるから、長所は益々發揮し短所は次第に改良しなければならぬ。そして健全なる佛教の思想は一方には日本の長所を助け、一方には短所を矯正する指導者であります。例へば實行的の點については學問や道德よりも、より以上に實行を明かにするものであつて信仰は直ちに道德の實行を促し、その信ずる所を實現するために有

らゆる困難を忍んで勇往邁進せしむるのである。又國民の度量が廣濶で包容的であるといふ點については　佛教は頗る包容的の思想を教ふるものである。又日本の國民が應化性とか同化性と云ふやうな性質をもつて居てあらゆる思想を調節して行くといふ點については、佛教は最もよく日本に同化して居るものである。又國民に統一性があり色々の知識文明を統一すると云ふ點については、佛教は頗る包容統一の思想に富んで居るものである。又短所を云へば、日本人は短氣で善い事でも少しやると直ぐ飽いてしまふ、又淺薄の風があつて哲學的に深く研究しないで表面の研究で止めるとか云ふ風に、數へ擧げれば限りがありませぬけれども、それ等の點については佛教を信じて短氣になるとか、虚榮心を起すとか、思想が淺薄になると云ふ樣なことはない。我が國民の短所は佛教を信ずれば矯正せられ、長所は益々助長せらるゝのである、佛教を公平に見たら日本國民を善導するものと見るのが穩健な見方であります。

(4)　儒教と佛教

佛教の日本化を見るには、先づ儒教と佛教との關係を見なければならぬのであつて。儒教が日本の文明中に於て佛教と如何なる接觸を取つたかと云へば、此の兩者は相倚り相助けて日本の文明を進歩せしめた歷史をもつて居るのであります。殊に儒教が普及したのは佛教徒の力が大に與つて居るのである。又儒教を日本化せしめたのは聖德太子、菅原道眞卿、北畠親房卿、日蓮上人、德川光圀卿と云ふやうな人々の力に依つて居るのであつて、儒者風に考へて居つた人の頭から、儒教が日本の文明を助長するやうに發達したのではありませぬ。皆其の間に佛教徒の力があつて儒教が日本化したのであります。

其一二の實例をお話すれば、儒教が日本化した大事な點は忠孝主義であります。儒教が忠孝主義となつて現はれ、就中大義名分を明かにした所の思想は、無論日本の國

體の靈德が然からしめたのでありますが、近い所の原因は誰が行つたかと云ふと、今申した聖德太子、道眞卿、親房卿、日蓮上人、光圀卿等の力であります。道眞卿は和魂漢才を發揮されて居りますけれども、それは大分古い時代のことで、其の後に愈々儒敎を取つて日本の國に當欽めて、忠孝主義大義名分を發揮したのは、日蓮上人であると云つて宜いと思ひます。又儒敎が日本の忠孝道德に變つて來たのは、前にも申した如く伯夷叔齊の故事から變はつて來たのであつて、伯夷叔齊は周の武王が殷の紂王を伐たんとした時に、馬を叩いて諫めた忠臣であります。其の時諫が容れられないために西山に隱れて、歌を作り『以暴易暴兮』と云つて周の粟を食はなかつたのである。それで孔子は「武王は美を盡して善を盡さず」と云つた、それが問題となつて遂に史記に於て司馬遷が色々の人の傳を書く時分に、比干とか箕子とか多くの忠臣の中で伯夷叔齊を眞先に擧げて其の德を鼓吹したのであります。それから唐の時代に韓退之がこれを鼓吹し、文天祥のやうな忠烈な人が出たのも又他の忠臣義士が出たのも皆伯夷叔齊の風を望んで起つたと云はれて居るが、日本にもこれが影響を與へて光圀卿が大日本史を作られたのも、伯夷叔齊の傳を讀んで感奮したのが本であります。一方に義公の感ぜられたのは、兄弟が讓り合ひをしたことを感じたので、自分の兄上の賴重卿を置いて自分が代を繼ぐことは出來ないと思はれた云々と云ふことを書いたものもあるが、西山公隨筆と云つて義公自ら書いたものを見ると、兄弟推讓の問題ではなくして『文王は聖人なり、武王は聖と申し難し、伯夷が諫こそ正道なれ、武王簒奪の議遁れ難し、又書經を見るに殷を討つ時、さま〳〵諭言多く、殷を討つて後も民の懷き難かりしを、言辯多く宥められしこと、堯舜にあるまじきこと也、夫れ大義の正道は云釋を用ゐず』と云ふやうなことがはつきり書いてある。ツマリ伯夷叔齊が武王を諫めたのは正道で武王が紂王を伐つたのは簒奪の責を遁れ難いと云ふことを書いて居られるのであつて、これに感奮して日本にも斯う云ふ不都合の者が現れてはならぬと云ふ所から、大日本史を書かれたと云ふことであります。其の外當時の學者で伯夷叔齊

を論じない者は到底道德を語ることが出來なかつた位で、苟も勤王の事を說く者は必ず伯夷叔齊の事を論じて居るのであります。堀田正俊の闕言錄中にも『君は一人なとり雖も而かも大、民は億兆なりと雖も而も小なり矣』とあり。又山崎闇齋の「湯武革命論」にも、紀の維貞の「國の基」にも書いてあります。義公が隱居して西山公と稱したのは伯夷叔齊の居つた山の名から取つたのであります。此の人の忠愛の觀念が大日本史となつて顯れ、それに感じて勤王の士が續々呼應するに至つたのであります。水戸學派が儒敎を日本化したのは西山公が本でありますが、日蓮上人はこれより前に儒敎を日本化することに努めた人である。日蓮上人は鎌倉幕府を諫めて、どうしても諫めが用ひられないので身延山に隱遁したのであります。日蓮上人は『法を知り國を思ふ』といふことを云はれて居りますが、卽ち一方には大義名分を明かにし、政權が武門に移つたのを奉還して皇室の御稜威を輝かすやうにし、又一方には思想界の紛亂を統一して眞正の德義を立つる爲に努力されたのでありまして此の法と國との大義名分が明かにならぬと云ふことを嘆いて樣々に諫めたが、用ひられなかつたので止むを得ずして身延山に隱遁したのであります。諫めて用ひられずんば山林に身を隱すと云ふことがあり、或は三度諫めて退くは古の道なりと云ふことがありますが、それに依つて上人は身延山に隱遁して丁度伯夷叔齊が首陽山で蕨を採つて食したと同じやうな境涯で終つたので、義公が隱居して西山公と稱して居つたのも同じであります。此の意味を十分解釋すれば、日蓮上人と云ふ人は儒敎の精神に就ても模範を示し、一方には忠愛の精神を鼓吹し、さうして伯夷叔齊の跡を追うて居るのであります　それから大義名分については屢々お聞きでありませうが、開目鈔の中にも自分の父が王の敵となれば父を捨てゝ王に從ふのが孝の大なるものであると云ふことが言つてありますし、又『父母の謀叛などを起すに從はぬが孝養にて候』と言つて、大義名分をはつきり書いて居るのであります。

それから儒敎が次第に實行的になり、王陽明學などが日本の學問に於ては空論でな

く實行的倫理的の敎となり、素行先生の如きは武敎を立てるといふ風に、有らゆる觀念に於て儒敎が實行的となつて顯れて來たと云ふことでありますが、此の實行的の觀念に於ては日蓮上人などが最も實行的で、儒敎の忠君愛國の精神を其の當時に實現したのであります。日蓮上人の當時には學者も居つたのでありませうが、當時の狀態を嘆いて政治家を諫めた者も無く勢力に盲從して居る者ばかりであつたが、日蓮上人は源平二家を「王の門を守る犬二匹候」と云ひ、或は北條に對して「謀叛人なり」と明言して居る。これなどは儒敎の道德を實行的活動的に顯はして居るので、佛敎徒であるからと云つてぼんやりして居る者でない。其の外儒敎が日本化して來たことについては餘程佛敎の力がある。武士のみならず民間にまで行き亘つた儒敎、卽ち貝原益軒先生などの思想からも儒敎は民間の商人にまで入つたのでありますが、一方には多くの僧侶の手を傳うて寺小屋を傳うて、日本の文明に入つて居るのであります。武士が閥族的に日本の文明を進めた者として任じて居るが、廣く民間に儒學を傳へたのは佛敎徒であつて、大學論語の本を開いて讀むことは誰に多く敎はつたかと云へば佛敎徒に多く敎はつて居るのである。そして其の間に儒敎の話と佛敎の話とが多少調和されて國民の思想に吹込まれたのであります。德川時代には變屈な學者や武士は佛敎を斥けて居つたが今日の敎育では小學校などでも儒敎を尊重しないし儒者も衰へて居るから、大學論語を取つて國民に儒敎の精神を鼓吹して居る者の大多數は佛敎徒であります、今日は勿論將來も矢張りさうであらうと思ひます。

(5) 佛敎の使命

前にも申しました通り佛敎の惡い所は無論改良を加へて行かなければならぬのでありますが、併し健全なる佛敎は確かに日本國の本來有つて居る建國の理想を發揮する上に大關係を有するものであります。日本建國の神秘を說明する上にも、宏遠なる世界大の理想を發揮する上にも、佛敎が翼賛することは餘程大事な點であります。卽ち

日本建國の神秘及日本の世界大の理想を翼賛することは佛教の使命であります。それから現代の弊害は隨分奥深い思想から起つて來て居るから、たゞ一通りの儒教の道德や、在來の歴史因縁では、今日の思想の動搖を矯正することは困難であつて、最も深き根柢からこれを導いて行かなければ駄目である、此の點に向つても佛教は將來一層勵まなければならぬ使命があると思ふ。更に進んで世界の文明を融合して行くことは佛教の努力すべき大任務である、佛教を他人扱ひにして進んで行つたならば日本の思想界には缺陷が多くなるであらう。更に新しき文明、理想の文明を築いて行くには、佛教の有する深遠なる信仰と健全なる思想とを必要とする。理想を滿足せしむる哲學の眞理と感情を滿足せしむると宗教の信仰とが一致して進んで行き、それが文明の中心となるのが世界の要求であります。さう云ふ場合には儒教のみでは不滿を感ずる、然るに佛教は根柢が健全であつて哲學的の滿足を與へ又一方には宗教の健全なる信仰を鼓吹するものである。眞に日本が世界の文明に參加して行くには一日も早く理想にも信仰にも優越なるものを打立てなければならぬのでそこに佛教の大切な使命があると思ふのであります。尚ほさう云ふ考から西洋の思想界を一瞥致しますれば最初にお話致しました通り西洋の思想にも色々尊い所がありますが、それは自ら日本の在來の思想に依て適當に洗錬することが出來ると信ずるのであります。

今迄述べた如く三教融合の思想を以て進んだならば、我國には彼等のもたない立派な國家があり彼等の知らない健全な宗教があり又實行に於ても彼等の倫理に打勝つ所のものがあるのであるから、三教融合して進んだならば決して西洋の文明に遜色はないと信じます。又理想の國家と云ふことを申しますが、無論我國は建國の事情が立派であり歴史も美しいのであるから、假令思想の方面が貧弱になりたがる弊はありましても、其の點を十分に注意して進んだならば立派な國が發育するのである。又西洋は學術が旺盛であると云ふが、日本に於ても文部省が學術の奬勵に努めて居りますから西洋に劣るやうなことはありますまい。それから傳道の熱誠は西洋人の方が強い、

日本はこれについては悲しい哉或る一部の宗教家が努力して居るのみで全體に於て健全なる傳道は行はれて居らぬ。次に西洋人は宗教の意識が進んで居りますが、日本人は大體を通じて宗教に對する觀念意識が幼稚であります。此の點は宗教の信仰をするとせぬとに拘らず、宗教に對する觀察をもつと進める必要がある。それから社會政策の實行も缺けて居るから佛教徒を覺醒して貢獻せしめなければならぬ。又人道の精神や社會道德も宗教を善用しなければ單に學校教育のみでは充分であるまい、どうしても宗教の力と相伴はなければならぬ。又個人の自覺を西洋ではやかましく言ふが、これは日本でも將に起りかけて居りますから、健全なる宗教を以て適當に指導せなければなりません。又西洋の短所は極端に走りたがる弊がある、日本でも其の弊に感染し兎角極端に走りたがり既に政治上社會上には現れて來て居ます、これは十分に注意しなければならぬ所である。それから薄ぺらな現實主義、自然主義、或は法律萬能主義といふ樣なものもあり其の他宗教に伴ふ固陋の弊もある。けれども三教融合の思想を以てこれに對すれば斯の如き西洋の固陋な弊害を受けることはないと信ずるのであります。

併しながら今の所では西洋の文明に接觸する準備が足らぬ。たゞ西洋の思想の良いものを迎へ惡いものを拒絶すると云つても、在來の思想系統を調べ其の思想を國民に復活しなければ西洋の文明に對して行くことは出來ぬ。それも古い建國の精神とか儒教、佛教の思想が今日の間に合はぬければ仕方がないが、段々調べて見ると日本の古代の歴史にある事實も立派であるし儒教の精神も立派である、又佛教の教義信仰も立派であるから、明治維新の時に考へたやうな狹い考を繰返すことなく、西洋の文明に當るには在來の日本の文明に向つて新しき考察を加へ、さうして國民思想の健全充實を計らなければならぬと思ふのであります。

尙ほ終りに一言して置きたいことは、儒者が佛教に對して綱常倫理を破却するものであると申しましたことは、佛教徒は永久に頂門の一針として忘るゝことなく其の弊

に陷らぬ用意を忘つてはならぬことと思ふのであります。又水戸學派の儒者は神道派に對して、國體の事を言ふは宜いが其の思想の狹隘なる語るに足らぬと罵つて居りますが、國體を論ずる場合に狹い了簡に陷るのは宜しくない。又儒者が人格實在と云ふやうな深遠なる教義を顧みず單に日用道德の考を立てゝ來たことは今後の文明に對しては物足らぬのであるから、佛教徒が忠告したやうに根柢ある教義信仰に依らなければならぬ、この點を儒者輩も顧み互に親切な忠告を容れて、佛教徒は人倫綱常を破却するやうなことなく人生に寄與する樣に努め、神道學者は狹隘固陋の見解を棄て又儒者は佛教に在る哲理と信仰の妙處を尊敬し、斯くして健全なる思想を立てなければならぬと思ふのであります。水戸光圀卿の如きも世間で思ふやうな排佛家ではありませぬ。これは儒者が自分の方に引付ける爲めに佛教を信じたと云つては具合が惡いから排佛家のやうにして言ひ做してしまつたので、光圀卿自身としては日蓮上人を慕はれ、日蓮上人のために大きな學校を立て十七ヶ條の規則を作つて居られる、又日持上人が海外に傳道に行つたことを敬慕して對馬の藩主に言付けて朝鮮に行つた日持上人の事蹟を調べさせて居る。さうして又寺社に對しては淫祀迷信に關するもの千八十六ヶ所を廢し、一方に由緒ある寺社を保護して居られるので、敬神の觀念も奉佛の觀念も整うて居つたのであります。然るに後代の儒者が光圀卿は敬神崇儒の人であつて排佛家であつたやうに言ふたために、段々世人をして排佛家と思はしむるやうになつたのであります。昔の達人にはそんな偏したり囚はれたりして居る人はなかつた事が今日では漸く分つて參りました。これは德川時代に儒者が跋扈した弊風であるがそれが今の教育家の頭に遺傳して來て深遠なる哲理や信仰問題を惡く云ふやうになりそれがまた今の青年に影響して來て居るのであります、これは永久に日本を禍するものであるから日本人は深遠なる哲理と宗教の信仰と倫理の觀念とを併せて養成し堂々として進んで行くやうにありたいものであります。

法

幢

大正八年三月十日印刷
大正八年三月廿日發行

■法幢 奥付
正價壹圓六拾錢

《不許複製》

著者 本多日生

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 株式會社博文館 右代表者 取締役社長 大橋進一

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 高橋季吉

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 株式會社博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區本町三丁目八番地 振替東京二〇四〇 株式會社博文館

世界文明の新紀元

東京帝國大學文科大學教授
文學博士
姉崎正治先生著

地大に震ひて新しき泉湧き、十九世紀の競爭文明は破產して、二十世紀は將に協同文明の新紀元を開かんとす。二十年前ドイツ文明の破綻を論破したる著者は、茲に大戰の終結に際して、過去を評論し、現代を警策して、將來の世界的新展望を世に示さんとす。

四六判洋裝函入
紙數約五百頁　正價壹圓五拾錢　送料八錢

株式會社
博文館
東京本町

縮刷
續正

一年有半

故中江兆民先生著
正價七拾五錢　送料六錢

大僧正
本多日生師著

日蓮聖人の感激

人間の崇高なる行爲は感激精神より起る、冷靜なる理智の承認を經て、勇猛なる意思を鍛錬し、清新なる情操の煥發する所、其處に萬代に龜鑑たるべき芳躅を示す。日蓮上人は法國冥合に感激し、本佛に對し、衆生に對し君國に對し、父母に對し、師匠に對し、弟子に對し、信徒に對し、人生に對し、自然に對し、將た時事に對して崇高なる感激精神を煥發せり。本書は其の各方面を詳密に紹介し、以て今人人格の修養に資せんとす。著者の情操を通ほして聖人の梵音を聞く、亦是れ人生の快事ならむ。

四六判洋裝函入
紙數四百廿餘頁
正價壹圓六拾錢　送料八錢

東京
株式會社
博文館
本町

法華經講義

全二冊

菊判洋裝特製函入美本
紙數各壹千餘頁
上卷—下卷—各二圓三十錢
郵稅各冊十二錢

東京帝國大學文科大學教授
文學博士 姉崎正治君著

法華經の行者日蓮

圓滿の人格、血涙の一生、熱火の信仰、深遠の理想、描き來つて史詩あり、紀傳あり、哲學あり、宗教あり、懺悔の告白と救世の使命と、憂國の警策と感應の法樂と、奮戰の叫びと信仰の凱歌と參差照應の壯觀古今に冠絶す。

忠實に上人の遺文に基き、佛教史、宗教學、宗教心理の通義に照らして「法華經行者」の一生を活現す。是れ二十世紀の新法華經也著者研鑽十五年、「法華經行者」を世界に公表すると同時に之を日本の公衆に薦む。

大判總布函入紙數六百餘頁
筆蹟(コロタイプ、寫眞、凸版)十五枚
肖像寫眞版大判地圖各一葉

正價二圓五十錢
送料內地—十二錢

解説要本 法華經の行者日蓮

『法華經の行者日蓮』の〔廣本〕は批評研究的、今度の〔要本〕は解説的に要を摘むで、佛教の術語を一々近代語に直し、又脚註で解説したもの。〔廣本〕以後の新研究や、以外の材料を加へて、而かも容易に通讀し得る樣、〔廣本〕の四分一で『法華經行者』の經歷、思想、信仰、努力、血と涙との跡を傳へたのが、この一冊。

三六判總布天金絲函入美本
日蓮上人眞蹟六葉挿入
正價金八拾五錢 郵稅六錢

東京 博文館 株式會社 發行

東郷元帥 外朝野諸名士題字

文學博士 三宅雪嶺君序文

大僧正 本多日生猊下著

本多日生師著

國民道德と日蓮主義

本書は佛教史三千年間に現れたる法華經に關する各種の思想は悉く之を參照し正法華經ケルン譯等を對照して法華の全文を詳細に解說し他面には法華經を基準として現代に要求する宗教の要義を批判し又我邦の文學史を考察して此經に關する詩歌を列擧し更に經中の要處には日蓮聖人の遺訓を引證し又科段は綿密なる圖表を附せり、序說には佛教全般に關する要義を擧げて之を解說し。釋文には釋題、大意、文々解釋の三段に分ち。文々解釋の下には科段。通解。妙解。異解。批判。質疑。解決。參考。讃唱の項目を立てゝ極めて懇切に之を說明せり。法華經が世界最第一の寶典たるは世既に定論あり苟くも思想の源泉を掬んで正明なる信解を得んとするものは何人も研究し讃仰すべき唯一の寶典なり。

三五判洋裝函入
紙數四百八十頁
正價壹圓拾錢
郵稅六錢

東京 博文館 株式會社 發行 本町

大僧正 本多日生師著

日蓮主義

三五判上製函入
紙數六百五十頁

正價壹圓拾錢 郵税六錢

本書講ずる所、無慮十有五萬言、第一篇には宗教の必要と其の選擇を論じ、第二篇には、我國思想史の正統を論じ、第三篇には國民道德と宗教信仰の關係を明し、第四篇には破佛論の主張を擧げて之を粉碎し、第五篇には各種の佛教觀を辯じて其實歸を證し、第六篇には釋迦牟尼の芳躅を尋ねて清新なる信仰の泉を掬み、第七篇には佛教信仰の體系を論じて其の源流と分派と統歸とを辯じ、第八第九第十の三篇には一切經の神髓たる壽量品の全文を講述し、第十一篇には日蓮主義に對する各種の觀察と眞意義を講明せり、又信仰者の爲に修法の次第と法華經の要品を揭げ更に本經祖書の要文を拔粹して信念の警策に供せり本書は最も堅實なる根據に立つて時代の要求を參酌せる日蓮主義紹介の絕好良書なり。

姉崎博士 山川智應君 共著

高山樗牛と日蓮上人

中判洋裝總クロース上製
口繪數葉紙數四六四頁

正價壹圓五十錢 郵税八錢

樗牛が一生は日蓮上人の渴仰を以て終れり。上人が上行再現の自覺は、樗牛をして久遠の靈光に接せしめたり、最後の一年間に於ける樗牛氏の信仰と熱血とを集め、加ふるに況後錄の註解と、日蓮上人及び樗牛の信仰に關する編者の論評を加ふ、一部日蓮主義の好指鍼にして、又實に樗牛が眞信の告白集なり。

株式會社 博文館

大僧正 本多日生師著

日蓮聖人正傳

本書は、最も確實なる史蹟に憑り、聖人一代の經歷と主張とを詳敍す。特に聖人の主要なる著作に對しては一一その內容を紹介し、又時代の背景たる承久の亂と蒙古來とに關しては、正確寡なる史實に徵して之を記述し、又後人の添加せる怪誕不稽の記事は悉く之を刪却せり、聖人を敬慕する家庭、修養の力と思想の光とを得んとする人は、速に一本を備へるべし。

中判洋裝函入美本
紙數四百七十餘頁

正價壹圓六拾錢 送料八錢

文學士 和田徹城君著

淫祠と邪神

聖天、大黑、稻荷、鬼子母神、辯天、毘沙門、閻魔、帝釋、金毘羅、庚申、摩利支天、妙見、秋葉三尺坊等の如く、富貴榮達、息災延命の靈驗を吹聽して世人の僥倖心に投ずる神に就て、その本性を根本的に解決せんとしたるもの、印度、支那、日本に亙りて成立の因由、信仰の變遷を尋ね、或は祕密裡に傳ふる神像修法に論及し、各の神に就てその功德と價値を決定せり。これ等の神に祈禱して福德と健康を得んとする者、これ等の神の流行を見て心外する者、俗間信仰を見て國民思想を云爲せんとする人士に一讀を薦む。

三五判洋裝上製
紙數二百九十頁

正價金壹圓 送料六錢

株式會社 博文館

日蓮主義綱要

大僧正　本多日生師著

本書は日蓮主義の判教觀、佛陀觀、人身觀、本尊觀、行法觀、得益觀の六大教義に關し、正確なる根據に立つて懇篤なる解明を與へしもの、日蓮主義の宗教的方面の研究には、最善の努力を加へし書なり。正信正解を獲て安住の地に達せんと欲する者は請ふ速に精讀せよ。

四六判函入四百五十頁
正價壹圓六拾錢
送料八錢

東京帝國大學文科大學教授
學士
姉崎正治君著

新時代の宗教

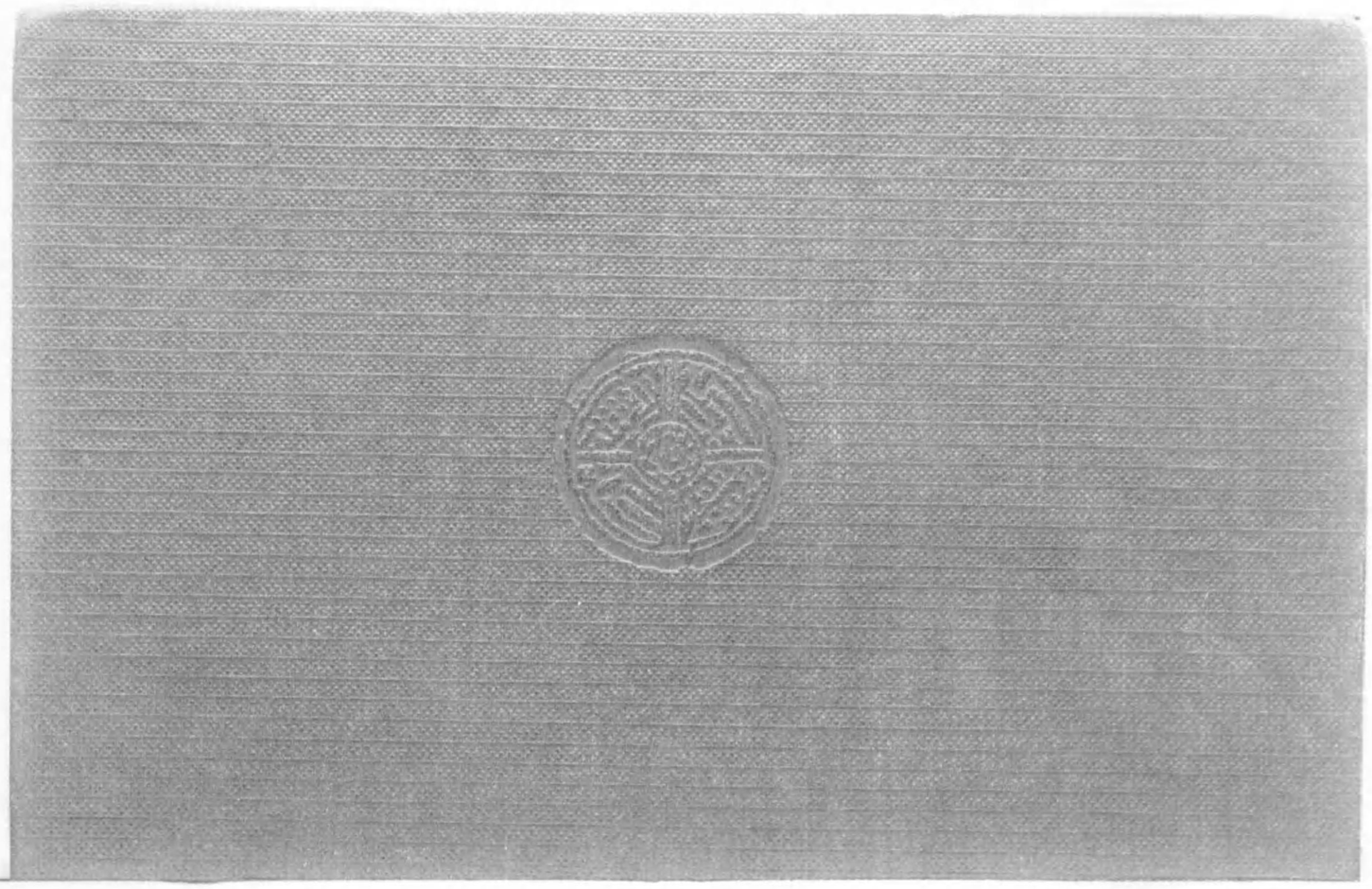
正價壹圓廿錢
送料八錢

根本佛教

正價貳圓
送料十二錢

株式會社
博文館
東京市本町

325
535



終